岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repositry

Title	小学校高学年児童における運動の楽しさ　：　体育嫌いな児童に着目して
Author(s)	東, 健司; 春日, 晃章; 中野, 貴博; 曽我部, 宗
Citation	[岐阜大学教育学部研究報告. 自然科学] vol.[42] p.[77]-[82]
Issue Date	2018
Rights	
Version	岐阜大大学院学教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University) / 岐阜大学教育学部保健体育講座 (Department of Physical Education, Faculty of Education, Gifu University) / 名古屋学院大学スポーツ健康学部 (Faculty of Health and Sports, Nagoya Gakuin University) / 岐阜大大学院学教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/75005

※この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

岐阜大学教育学部研究報告（自然科学）第42巻，77-82，2018年３月
Sci. Rep. Fac. Educ. Gifu Univ.（Nat. Sci.）42, 77-82, March 2018

小学校高学年児童における運動の楽しさ
-体育嫌いな児童に着目して-

東健司[1)]・春日晃章[2)]・中野貴博[3)]・曽我部宗[1)]

Exercise fun in elementary school high school children
- Focusing on children who do not like physical education -

Kenji HIGASHI[1)], Kosho KASUGA[2)], Takahiro NAKANO[3)]and Shu SOGABE[1)]

1）岐阜大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Gifu University
2）岐阜大学教育学部保健体育講座
Department of Physical Education, Faculty of Education, Gifu University
3）名古屋学院大学スポーツ健康学部
Faculty of Health and Sports, Nagoya Gakuin University

キーワード: 体育授業，運動場面，価値観
Keywords : Physical education lesson, Exercise scene, Values

I. 諸言

近年，子どもの体力に関する問題が数多く報告されている．全国体力・運動能力・運動習慣等調査報告書[1)]によると，現在児童・生徒の体力・運動能力は，緩やかな向上傾向または，横ばい傾向にあると報告されている．しかし，子どもの体力水準が高かった昭和60年頃と比べると依然として低いものとなっている．また，子どもの体力問題だけでなく運動習慣および体力の二極化が問題視されている[2)3)4)]．加賀谷[5)]は，体力の高い子どもに大きな変化はみられないが，体力の低い子どもが増えており，体力の二極化が深刻化していると述べている．

子どもの体力に関する問題に伴い，運動やスポーツに対する意識が低下しているとされている．全国体力・運動能力・運動習慣等調査報告書[1)]において運動やスポーツが嫌いと回答した子どもの割合は，平成26年度以降男女ともに増加し続けていると報告している．また鹿児島県総合センター[6)]は，小学3・4年生の時に体育を苦手と思うようになった人が多く，この時期から運動嫌いが増加していることを報告している．このように運動や体育を嫌いとする児童が数多くいることは明らかである．

体育・スポーツに対する関心や意欲は，日ごろの運動実践とともに，運動は「楽しい」ものであるという体験を持たせることが、関心や意欲を向上させるために重要ではないかと報告されている[7)8)]．また，文部科学省は，体育の授業が楽しいと感じている児童・生徒の方が嫌いと感じている児童・生徒より体力合計点が高い傾向を示しており，運動・体育に対する嗜好の高低が体力に影響していることを明らかにしている[9)]．また林[10)]は，体育授業と運動・スポーツに対する意識を調査した結果，体育授業に対して「楽しい」と回答したものの多くが，「運動は日常生活に役立つものであり，学ぶべきことがある」と考え，運動の必要性を示した．一方，体育授業に対して「楽しくない」と回答したものは，「運動を通して日常生活に役立つことはない」と考え，体育授業に対する意識の違いが運動・スポーツに対する価値観の違いにつながっていると考えられる．

これらのことから，体育の嗜好によって運動能力および運動に対する価値観に大きな違いがみられることが考えられる．さらに体育授業の意識の違いが運動・スポーツに対する価値観に大きく影響されること

から，体育嫌いの中でも体を動かすこと自体が嫌いな児童やどちらかと言えば嫌いな児童など体育を嫌いとする程度は様々であり，価値観もまた違いがみられると考えられる．

そこで本研究は，体育を嫌いとする児童を対象に嫌いとする程度によって，運動に対する価値観にいかなる違いがあるのか検討することを目的とした．

II. 研究方法

1）対象

G 県公立小学校の高学年児童 1846 名を対象に，5 件法の質問紙調査を行った．そのうち質問項目の「体育授業の好き嫌い」において少し嫌い（112 名）および嫌い（82 名）と回答した 194 名を分析対象とした．

2）調査方法及び調査項目

G 県公立小学校 13 校に通う児童に対して質問紙調査を行った．プライバシー保護のために無記名とし，配布・回収ともに個別の封筒に入れて行った．質問内容は記入者の属性（性別，年齢）および体育授業に対する嗜好，運動場面を表した 17 項目を設定し，設定した運動場面に対する価値観を「とても楽しい」,「少し楽しい」,「どちらでもない」,「あまり楽しくない」,「まったく楽しくない」の 5 段階で回答させた．運動場面に関する要因は，能力に関わる運動場面，勝敗に関わる運動場面，運動強度に関わる運動場面，他者と関わる運動場面および評価に関わる運動場面とした．

表 1　運動場面に関した 17 項目

運動場面	質問項目
能力に関する運動場面	①上手に運動スポーツができたとき ②なかなか上手に運動やスポーツができないとき
勝敗に関わる運動場面	③勝ち負けを気にしない人と運動やスポーツをしているとき ④勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき ⑤勝ち負けのつく運動やスポーツをしているとき ⑥運動やスポーツで勝ったとき ⑦運動やスポーツで負けたとき
運動強度に関わる運動場面	⑧運動やスポーツでたくさん汗をかいたとき ⑨しんどくて疲れる運動やスポーツをしているとき
他者と関わる運動場面	⑩みんなで運動やスポーツをしているときを ⑪ひとりで運動やスポーツをしているときを ⑫年上のお兄さんやお姉さんと運動やスポーツをしているとき ⑬上手な人と運動やスポーツをしているときを ⑭上手でない人と運動やスポーツをしているときを
評価に関わる運動場面	⑮上手にできたことを先生や友達にほめられたとき ⑯上手にできなかったことを先生や友達に注意されたとき ⑰先生などに運動やスポーツを教えてもらっているとき

3）分析方法

対象者のうち少し嫌いと回答した児童を「少し嫌い群」，嫌いと回答した児童を「嫌い群」とし，2 群間の意識の相違をクロス集計およびカイ二乗検定を用いてそれぞれ検討した．統計には Excel 統計 2012（SSRI 社）を利用した．なお，本研究の統計的有意水準はすべて 5%未満とした．

III. 結果および考察

1）少し嫌い群および嫌い群の特徴

図 1 は，少し嫌い群および嫌い群において，運動場面を表した 17 項目に対する各回答の割合を総合的に示したものである．少し嫌い群は「とても楽しい」と回答した割合が 17%であるのに対し，嫌い群は 11%であった．また少し嫌い群は「まったく楽しくない」と回答した割合が 16%であるのに対し，嫌い群は 43%

であった．体育を嫌いと感じる程度が大きい児童は，運動に対して楽しくないと感じる割合が高くなる傾向が示された．

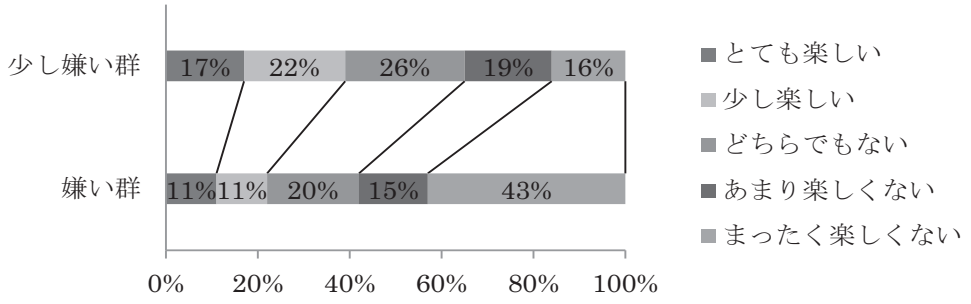

図 1　少し嫌い群，嫌い群における全質問に対する回答の割合

2）各運動場面と群間における価値観の相違

表 2 は，少し嫌い群および嫌い群と各運動場面の楽しさをクロス集計した結果および 2 群間の相違をカイ二乗検定により検討した結果である．

カイ二乗検定の結果，すべての項目において 2 群間に有意な差が認められた．このことから体育が少し嫌いな児童と嫌いな児童では，運動に対する価値観に違いがあると示唆された．

クロス集計の結果，「①：上手に運動やスポーツができたとき」において少し嫌い群は 50.4%，嫌い群は 27.2%もの児童が「とても楽しい」と回答した．一方嫌い群において「まったく楽しくない」と回答した児童は 21.0%であった．また，「②：なかなか上手に運動やスポーツができないとき」において「あまり楽しくない」，「まったく楽しくない」と回答した児童は，少し嫌い群で 78.3%，嫌い群で 81.3%と高い値を示した．嫌い群において「①：上手に運動やスポーツができたとき」は，すべての項目の中で「とても楽しい」と回答した割合が最も高い結果となった．運動やスポーツが「できた・勝った」などの運動有能感を高めることで運動に対して内発的動機づけがされることや運動の楽しさを体験できることが明らかにされている[11) 12)]．また出井[13)]は，運動やスポーツが得意な児童は，苦手な児童より運動有能感に差がみられ，特に運動が苦手な児童は，身体的有能さに顕著であると報告している．これらのことから本調査でも同様な結果が得られた．しかし「①：上手に運動やスポーツができたとき」の嫌い群において「まったく楽しくない」と回答した児童は 20%を超えており，運動やスポーツができた・できなかったに関わらず楽しくないと感じ，運動自体が嫌いであることが推察された．

「③：勝ち負けを気にしない人と運動やスポーツをしているとき」において「とても楽しい」と回答した割合は，少し嫌い群で 31.3%であり「まったく楽しくない」と回答した割合は 4.5%であった．一方で嫌い群において「まったく楽しくない」と回答した割合は 24.4%であった．また，「④：勝ち負けにこだわる人と運動やスポーツをしているとき」において「まったく楽しくない」と回答した割合は，少し嫌い群で 40.7%，嫌い群で 71.3%であった．「⑤：勝ち負けのつく運動やスポーツをしているとき」において少し嫌い群は，「まったく楽しくない」と回答した割合が 11.5%であるのに対し，嫌い群は 50.0%と差がみられた．加えて「⑥：運動やスポーツで勝ったとき」において「まったく楽しくない」と回答した児童が少し嫌い群で 3.5%であるのに対し，嫌い群は 19.5%であった．また「⑦：運動やスポーツで負けたとき」において少し嫌い群，嫌い群はそれぞれ 19.5%，46.3%の児童が「まったく楽しくない」と回答しており差がみられた．渡邊ら[14)]は，勝敗や順位が生ずることを嫌いとする理由として最も多く挙げられたのは，勝敗に負けたり，順位が下なのはすでに分かっているからであったと報告している．波多野ら[15)]は，「運動ぎらい」の発生メカニズムの中で，運動能力が低いことに対する劣等感が大きな要因として挙げられ，その劣等感が体育授業経験の中で増幅していると報告した．

表 2 少し嫌い群，嫌い群における相違

質問項目		とても楽しい	少し楽しい	どちらでもない	あまり楽しくない	まったく楽しくない	カイ二乗値	P 値	判定
①	少し嫌い群	50.4%	32.7%	9.7%	4.4%	2.7%	26.845	0.000	**
	嫌い群	27.2%	24.7%	19.8%	7.4%	21.0%			
②	少し嫌い群	1.8%	4.5%	15.3%	42.3%	36.0%	23.547	0.000	**
	嫌い群	2.5%	1.3%	15.0%	13.8%	67.5%			
③	少し嫌い群	31.3%	27.7%	30.4%	6.3%	4.5%	19.466	0.001	**
	嫌い群	26.8%	15.9%	23.2%	9.8%	24.4%			
④	少し嫌い群	5.3%	10.6%	17.7%	25.7%	40.7%	18.57	0.001	**
	嫌い群	2.5%	3.8%	6.3%	16.3%	71.3%			
⑤	少し嫌い群	15.9%	25.7%	24.8%	22.1%	11.5%	35.841	0.000	**
	嫌い群	11.0%	13.4%	15.9%	9.8%	50.0%			
⑥	少し嫌い群	49.6%	28.3%	15.0%	3.5%	3.5%	29.326	0.000	**
	嫌い群	22.0%	24.4%	19.5%	14.6%	19.5%			
⑦	少し嫌い群	1.8%	13.3%	31.9%	33.6%	19.5%	16.681	0.002	**
	嫌い群	1.2%	6.1%	23.2%	23.2%	46.3%			
⑧	少し嫌い群	17.7%	26.5%	33.6%	15.9%	6.2%	44.458	0.000	**
	嫌い群	7.3%	9.8%	23.2%	14.6%	45.1%			
⑨	少し嫌い群	2.7%	8.8%	24.8%	28.3%	35.4%	26.473	0.000	**
	嫌い群	6.1%	1.2%	9.8%	14.6%	68.3%			
⑩	少し嫌い群	14.2%	51.3%	21.2%	12.4%	0.9%	51.179	0.000	**
	嫌い群	9.8%	12.2%	24.4%	34.1%	19.5%			
⑪	少し嫌い群	8.0%	14.2%	22.1%	30.1%	25.7%	17.112	0.002	**
	嫌い群	7.3%	11.0%	13.4%	14.6%	53.7%			
⑫	少し嫌い群	17.7%	19.5%	37.2%	10.6%	15.0%	18.763	0.001	**
	嫌い群	15.9%	8.5%	23.2%	12.2%	40.2%			
⑬	少し嫌い群	17.7%	28.3%	29.2%	15.0%	9.7%	43.558	0.000	**
	嫌い群	6.2%	7.4%	18.5%	22.2%	45.7%			
⑭	少し嫌い群	11.5%	13.3%	43.4%	18.6%	13.3%	15.243	0.004	**
	嫌い群	12.2%	13.4%	25.6%	13.4%	35.4%			
⑮	少し嫌い群	31.9%	36.3%	20.4%	8.8%	2.7%	24.596	0.000	**
	嫌い群	18.5%	28.4%	25.9%	3.7%	23.5%			
⑯	少し嫌い群	0.0%	4.5%	23.6%	26.4%	45.5%	12.624	0.013	*
	嫌い群	1.2%	1.2%	15.9%	13.4%	68.3%			
⑰	少し嫌い群	8.0%	25.0%	42.9%	17.0%	7.1%	28.069	0.000	**
	嫌い群	8.5%	9.8%	29.3%	17.1%	35.4%			

注）①～⑰は表 1 を参照　　**：1%有意　*：5%有意

これらのことから勝敗に関わる運動場面において嫌い群は，勝負ごとに否定的であることや勝負に負けたときなど，劣等感を感じてしまうことから楽しさを感じておらず，それらの劣等感が体育を嫌いになる要因となっていることが考えられる．

「⑧：運動やスポーツでたくさん汗をかいたとき」において少し嫌い群，嫌い群はそれぞれ 44.2%，17.1%の児童が「とても楽しい」，「少し楽しい」と回答した．また嫌い群は 45.1%もの児童が「まったく楽しくない」と回答した．「⑨：しんどくて疲れる運動やスポーツをしているとき」においては，両群ともに「まったく楽しくない」と回答した割合が項目の中で最も高く，少し嫌い群は 35.4%，嫌い群は 68.3%であった．これらのことから嫌い群は運動やスポーツにおいて汗をかくことや運動をするといった行為自体に嫌悪感を抱いていると考えられる．

「⑩：みんなで運動やスポーツをしているとき」において少し嫌い群は，66.1%の児童が「とても楽しい」，

「少し楽しい」と回答しているが，嫌い群は53.6%の児童が「あまり楽しくない」,「まったく楽しくない」と回答しており，半数以上の児童が楽しくないと感じている．嫌い群において「⑪：ひとりで運動やスポーツをしているとき」に「あまり楽しくない」,「まったく楽しくない」と回答した児童は68.3%,「⑫：年上のお兄さんやお姉さんと運動やスポーツをしているとき」において52.4%,「⑬：上手な人と運動やスポーツをしているとき」において67.9%,「⑭:上手でない人と運動やスポーツをしているとき」において48.8%であった．このことから嫌い群は，ひとりで運動やスポーツをする機会は少なく，その機会が与えられたとしても楽しくないと感じていることがうかがえる．また運動が上手な人，上手でない人と運動することに関わらず他者と運動をすることに対して楽しさを感じていない傾向にあることが示唆された．

「⑮：上手にできたことを先生や友達にほめられたとき」において少し嫌い群および嫌い群は，それぞれ68.2%，46.9%の児童が「とても楽しい」,「少し楽しい」と回答した．しかし嫌い群において23.5%の児童は,「まったく楽しくない」と回答した.「⑯：上手にできなかったことを先生や友達に注意されたとき」において「まったく楽しくない」と回答した児童は，少し嫌い群で45.9%，嫌い群で68.3%であった．また,「⑰：先生などに運動やスポーツを教えてもらっているとき」において「まったく楽しくない」と回答した児童は，少し嫌い群が7.1%であるのに対し，嫌い群は35.4%であった．渡邊ら[13]は，教師の声かけが嫌いな理由は,「みんなから注目を浴びて恥ずかしいから」が最も多く挙げられたと報告した．また同調査において評価を受けることを嫌いとする理由について「上手い・下手で評価されるから」と報告している．これらのことから評価に関わる運動場面において，嫌い群は他者から評価をされることを嫌いとしていると考えられる．しかし，他者からほめられることで楽しいと感じている割合も高い．吉川ら[16]によると，「運動嫌い」の子どもの特徴として運動が得意などの運動や体育に対する良い経験や良い印象を持っている子どもが少ないと報告している．つまり運動や体育に対する良い経験を持たせることで運動嫌いは減少すると考えられる．

以上のことから体育を嫌いとする程度によって運動に対する価値観に違いがみられた．そのため同じ体育嫌いの中でも少し嫌い，嫌いのように，それぞれの考え方の違いに配慮し，体育授業を展開する必要があると考えられる．

IV．まとめ

本研究は，体育を嫌いとする児童を対象に，運動に対する価値観にいかなる違いがあるのか検証することを目的とした．分析の結果以下のような結論を得た．

1）カイ二乗検定の結果，体育が少し嫌いな児童と嫌いな児童との間には有意な差が認められ，運動に対する価値観に違いがある．

2）体育が少し嫌いな児童は運動やスポーツにおいて「できたとき」,「勝ったとき」および「ほめられたとき」など成功体験を味わうことで運動を楽しいと感じることが示唆された．よって技術的な指導ではなく，できるようになったことに対してほめることを優先させた指導が重要である．

3）体育が嫌いな児童は，運動やスポーツにおいて「できたとき」,「勝ったとき」など成功体験を味わうことができても楽しくないと感じている．また「汗をかくこと」や「他者と運動すること」においても楽しくないと感じていることから，運動すること自体に嫌悪感を抱いていることが推察された．そのため幼児期から運動の楽しさを味わうような取り組みが重要である．

V．参考文献

1)　スポーツ庁：平成28年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果，2017
2)　西嶋尚彦：青少年の体力低下傾向，体育の科学，　52，4-12，2002
3)　西嶋尚彦：子どもの体力の現状と対策，母子保健情報，65，23-30，2012
4)　豊島広之：子どものスポーツ運動実施動態，体育の科学，56，344-348，2006

5) 加賀谷淳子：ここまで危ない！子どもの体力-提言「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」，体育科教育，56，11，14-18，2008
6) 鹿児島県総合教育センター：より体育好きな児童を育てる体育学習の創造－体育を苦手とする児童に焦点を当ててー，1-28，2014
7) 加賀はづき，石川亘：「運動嫌い」・「体育嫌い」について-教師と生徒の相互認識差に着目して-，3，107-115，2006
8) 江島紘：1 人ひとりが満足する授業を目指して　学校体育 46，44-45，1993
9) 文部科学省：第 2 章　全国体力調査によって明らかになったこと，2011
10) 林園子：高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究，31，57-65，2013
11) 岡澤祥訓，三上憲孝：体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係，体育科教育，46，47-49，1998
12) 岡澤祥訓，諏訪祐一郎：「運動の楽しさ」と「運動有能感」との関係，体育教育，46，44-46，1998
13) 出井雄二：運動が苦手な小学校高学年児童の体力・運動能力の実態—運動有能感と体力・運動能力の関係から，24，47-62，2014
14) 渡邊義行，中嶌康貴：中学校体育授業で生じる「表と裏」の現象，8，75-100，2006
15) 波多野義郎，中村精男：「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究，26，177-187，1980
16) 吉川麻衣，山谷幸司，笹生心太：「運動嫌い Jr 体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究一小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して一，13，107-116，2012